

インタビュー

小関昌男氏に聞く

小関昌男氏略歴

- ◆ 一九三六年生まれ。
- ◆ 一九五八年、図書館職員養成所卒業。
- ◆ 同年、立教大学図書館に就職。
- ◆ 立教大学図書館閲覧課参考係長、運用課長（新座保存書庫開館時）、逐次刊行物課長、副館長などを歴任。
- ◆ 聖徳短期大学、東洋大学、同短期大学、亜細亜大学、立教大学などで非常勤講師として図書館学教育にも従事した。
- ◆ 日本図書館協会、日本図書館情報学会、日本索引家協会、資料組織研究会等で活動。
- ◆ 編著作に『メーザーライブラリー資料集―学生新聞に見る立教大学図書館史』（一九九二）、小関昌男（『立教大学図書館新座保存書庫―文献案内』（二〇〇一）、小関昌男）がある。

聞き手 鈴木勇一郎
山中一弘
編集 山中一弘

――まず年代を追ってお話をいただければと思います。図書館に就職されたあたりからお話をいただければと思います。

小関 これは年表です。これは図書館の誰が作ったんですか。上手に作りましたね。これです。

――これは何ですか。
小関 立教大学図書館の開館のときに……。
池袋図書館の開館ですか。

小関 そうそう。知りませんか。当時の阿久津事務部長さんから送られてきて、小泉さんからも送られてきて。これはよくまとめられているんです。後ろに年表があるものですからこれをコピーして、広げて書き込んだりしています。自分がいた年代とか、誰が館長をやっていたとか……。そうすると、「こんなにいたけど何もやって

いなかっただな」とか、「こういうことがあって」とか、イメージとしてできあがるではないですか。その中で一つ一つ思い出すものもあるかなと懐古しながら、という感じでしたね。

——そういう感じでお話を……。時系列でいいですか。そもそも立教に就職されたいきさつは。

図書館員人生の始まり

小関 僕は立教の卒業でないんです。僕が卒業した当時は文部省の図書館職員養成所という職業学校、専門学校みたいなもので、学校は吸収合併があつて、今は筑波大学の中の情報学群の中ですよ。

——昔、図情大と言ったやつですか。

小関 そうです。図書館情報大も今ありませんからね。短大も、養成所もあつたし、講習所時代もあつた。いつ頃できたのかとたまたま調べたら、大正一一（一九二二）年。大学令が公布されて立教が大学になる少し前です。そこがスタートで、僕が入るのは昭和三一（一九五六）年です。国立で、授業料はただでした。

——一学年ですか。

小関 一学年が六〇人で、Bコース二〇人もあつたから全体で八〇人ぐらいです。職業学校なので就職は楽でした。

——何年制だったんですか。

小関 二年制です。その前に福島大学の経済短期大学部に合格して。福島県福島市出身なものですから。翌年に地元の学芸学部合格です。でも東京に行きたいと思つて、たまたまこういうものがあつたから面白いなと、図書館は好きですから、受けたら入つてしまい、どうしようかと迷つていました。すぐ後ろに住んでいた福島大学の経済学部の相沢久という教授に相談したら「そういう特殊な学校のほうがいい」と勧めるので、来ちゃったんです。

それで二年間が終わると、就職口はたくさんありました。福島から入所した情報が入つたんでしよう、福島県立の図書館長がスカウトに来て、これは困つたなと。就職のクチがいっぱいある中から、どこにしようかと思案しましたが、立教大学を選びました。事前の知識はありません。行つたことがないし。受験の本に載っていたレング造りの写真の印象があつたものだから、気安い気持で入つちゃつたんです。

そんな感じでふらりと立教に入りましたが、一番喜んだのはおふくろです。「何で？」と聞いたらおふくろは若いときに聖公会の信者だったんです。昭和の一桁のころに教会に通つていて。これはずいぶん後になってから話ですが、『The Spirit of Missions』ってありますで

しよう、それを仕事で見えていたら、福島市のステパノ教会の集合写真を見つけてました。その中に「これがおふくろでないか」と、おふくろは亡くなって何年か経っていたものですから。これは絶対にそうだと直感し、コピーをとって、親戚、周りの者に送って問い合わせしたところ、やっぱりそうだったんです。

入ったときにそんなこととは知りませんでしたから、びっくりでした。一般教育の教務課長をやっていた英語の先生がステパノ教会で若いときに勤めていらした。宮城さん、聞いたことがないですか。

——僕は知らないです。

小関 宮城俊彦先生です。一般教育に所属して、教務課長で、一般教育の講師をやられてました。その人がステパノ教会に務めたことがあって、当時、司祭の青木伊作さんが現役でしたものですから、それは奇遇だということで、帰郷のたびにメッセンジャーの役目を果たしました。

——それは立教を選ぶ前に小関さんはご存じなかったんですか。

小関 全然知りません。青木さんという司祭も宮城先生のことも知らないです。司祭の奥さんがうちのおふくろの同級生だったのです。

——就職されてから分かったんですか。

小関 本当にそうです。縁というものがあんだなということが分かりました。入職したとき、職場の印象は「えっ?」という感じでした。何か暗い感じがしました。建物の、というよりも雰囲気です。昔はちよどここの部屋が応接室で、隣は校友会の事務室。両方の応接室として使っていました。最初の日の挨拶のときにこの部屋で「ちよつと待つて」と言われてしばらく待つていました。が、ときどき出入りするその人は、年配で、やせて、ブルゾンを着て、眼鏡をかけて。ここの職員の人とは思うけど……、なんとその人があの武藤さんという……。

——図書館の副館長の武藤重勝さん。

小関 当時の副館長です。私立大学の中でもリーダーシップをとっていて、いろいろな役を担っていて名を知られている人だったものだから「そうか?」とびっくりした記憶があります。やはり雰囲気は暗いなどという感じがしました。

——入られたのは昭和三三年ですか。

小関 そうです。昭和三三年です。事務所(現・立教学院史資料センター事務室)に入って突き当たった窓際のところ。当時の図書館長の番匠谷英一先生がいました。向かい合って座っているのが武藤重勝さん。入った右側に外国書を扱う洋書係、左側に日本語の本を扱う和書係と受入係がいて、手前のほうに庶務・会計をやる人がい

て、それが全部でした。それと、図書館の入口を入ると正面、階段の右に四畳半くらいの部屋があつて、そこに下駄箱と校務職員の方がいて、入館者はそこで靴をスリッパに履き替えて階段を上がつて行くと閲覧室（係）です。そんな様子でした。余談ですが、学生は入り口でノートに名前を記帳してから入室することになっていました。ついでにもう一つ、閲覧室は開架式であつたため、出る時にはカバンを開けて見せてから退館することになっていました。これは長く続いていました。

仕事は、どこで何をしろとも言われません。後から探りを入れて、武藤さんに聞いても、今まではどういう採用をしていたのか分からないし、OBの人のコネで入った、口コミで入ったというのが多かつたようなのです。武藤さんが私大の中でリーダーシップをとっている関係で、多少職人ばいのも採ればいいのではないかと、思ったみたいです。それが全体のポリシーとかではなくて、ちょっと試してみようかという程度でしたものだから、新人を育てるためのカリキュラムがあるわけではなく、たまたま前任者の辞めた机が空いているし、みんなが普段後回しにするようなことをやらせようということだったらしいです。

——それ以前の図書館員は正規の図書館教育を受けていたわけではないということですか。

小関 誰もいません。

——初めて専門の教育を受けた人として入ったわけですか。

小関 なかなか立教人として受け入れてもらえなかった雰囲気はありましたね。道村整理課長が図書館学コースのフルブライトで留学したということを後で知りましたが、道村さんは聞いたことがありますか。

——名前だけは。道村晃さんですね。

小関 そうです。「おまえ、立教を出ているんじゃないんだから、まず立教人にならないと駄目だ」と飲むたびに、旅行などに行くたびにくりかえし教育された記憶がありますね。全体に古い体質だなと。あまりいい印象はしなかつたですね。周りにいる人たちはいい人たちで、英文科の教授になつた江河徹さんが隣にいて、分類をやつていました。僕が入る少し前までは山田昭次先生が図書館にいました。

——そうらしいですね。

小関 武藤さんは、仕事よりとは言わないけれども「君たち、とにかく勉強しないと駄目だ」とすごく言つてました。江河君を見ろ、山田さんを見ろという感じで、一目置いていました。

——何係というのはなかつたんですか。

小関 図書館勤務を命ずるというだけで、どの係という

のはなかったですね。

——名簿上は館長が番匠谷英一、副館長兼事務課長が武藤重勝になっています。それとは別に道村さんが整理課長です。課はその二つだけです。

小関 現に仕事をしている場が外からは所属のように見られるだけで、一人一人が「整理課を命ずる」というのではないんです。職制上のルールもマニュアルもまだ整備されていなかったみたいです。僕の給料や処遇も中途半端で、いちいち本部に聞きに行ったりしました。どうしようかという反応だったこともありました。

——天野さんはもう係長だったんですね。

小関 そうです。役職はその三人です。

——ほかには伊沢さん、新井さん、石田さん……。あとは知らないな。

小関 僕は整理課に机があつたんで整理課で、とりあえずこれをお願いしますと、図書館の仕事でいうと戸籍簿づくりみたいな、回ってきた小さなカードの内容を原簿に転記する、立教整理業務の流れの最後の仕事をひたすら一年間やらされました。

——整理済みのやつを原簿に登録すると。

小関 何でも買えばそこでお金を払います。会計処理したらこれは立教のものだという形で戸籍簿みたいな登録番号を与えます。次に誰でも使えるように分類をつけた

り、目録でデータを作ったりして、最後にラベルを貼って利用者の方に持つていく、これが一連の流れなんだけれども、一人、二人でやっている小さな図書館の場合は立教のように原簿を最後にやったほうが楽です。その小図書館のスタイルがそのまま大きくなっただけだから、一番肝心な戸籍簿を与えるような単調な仕事は最後にたまってしまいます。一番おもしろくない仕事ですが、たまっていた原簿記入をひたすらやらされました。そうなんだ、という感じでしたね。二年目は何かあるのかな、と思つたら……。ちょうど法学部図書室が法学部の中にできたときに人員増が認められたようで、僕の後輩の鈴木（俊夫）君が入ってきたんです。「鈴木とおまえが行つて、法学部を手伝え」という形になって。あつちに行くときまた暗いところなんだろうと不安を抱きつつ学部に行きました。

——六号館ですか。

小関 そうです。

新設の法学部で

——入られたときは学部の図書室はなかったんですか。

小関 図書館の組織の中には何もないです。ただ図書資料を扱うところは物理的な形、機能的な形で、各学部、学科に図書室はいっぱいありました。名称もいろいろで

す。

そこには図書館の仕事をするような人たちがばらばらといるんですけど、図書館の所属でなくて、学部職員の方だったんです。そして、業務の流れでいえば整理部門をのぞいた前後の仕事はそちらの人達が担っていました。法学部図書室ができたときの……、これはご存じですか。

——はい。

小関 この中に法学部図書室ができたあたりのことは書いてあるんです（『研究と教育の場としての立教—その歴史を語る』総長室、二〇〇四年）。おもしろいです。法学部も普通の学部と同じような型にするのかと思ったら、法学部は東京大学の先生方が大勢来て、若手も東大を出た人が来て、東京大学のスタイルをそっくりそのまま持つてきて運営すると決まったんです。

—— 僕らは、何でそんなことをするんだらうと疑問を持っていたんだけど。先生方のほうが、自分たちの研究の延長線上として、植民地型と言ったかな、そのスタイルにしたいとおっしゃっているのかと思っただけです。しかし先生方はそんなことを思っただけで、元は国会図書館員だった神島二郎先生が、今の法学部のようなスタイルを目指さないといい学部ができない、とにかく自分たちでそういうレベルの高いものを作らうと学部の人たちを説得して、独自スタイルにしたそうです。

—— スタイルとは具体的にどう感じるですか。

小関 完全に独立型です。当時は松下正寿さんが総長で、法学部を作るのに力を尽くされましたね。法学部の設置のために特別に多額予算が何年間にわたって用意されていたんです。その膨大な資料は僕らのほうに仕事で回ってくるのかと思っていたら、そうではなくて、全部自分たちがやると。先生方が一冊一冊、研究の合間に、夏休みも返上して、自分たちが作った分類表で当てはめていくのです。専門分野に特化した分類表があるんです。それを使ってやろうと。ロー・ライブラリアンがいるわけじゃないし、育てたかったらしいですが、自分たちでロー・ライブラリーをつくらうとことでスタートしたので。

—— ほかの学部の先生たちからは「何であんなことをやるのか。みんなと一緒にやったほうがいいのに」とか、「法学部はいいんだな、お金はあるし、書庫は自分たちで持っているし」と羨ましがれる声も聞こえました。立教大学の中に法学部図書室という一つの完璧な研究図書館を作りたいという希望でスタートしたんです。

—— 当時は大学の図書館はどういう分類をやっていたんですか。

小関 圖書の分類は本という物理的なそのものを棚に並べるために分類します。そうするとどういうやり方がい

いのか、過去、中世からいろいろあるんです。中国では『経史子集』みたいな分け方をしますが、アメリカでは一八七六年、デューイが数字を使って全分野を分ける方法を発表しました。その分類法をみんなで作えば、ここに行っても同じ本は同じ場所に並ぶから、いいですね。アメリカではそれが定着していったんです。分類するには Decimal Classification (D C、十進分類法) がいいんだと本学の図書館長スバックマン先生は図書館大会でも述べているし、論文も二つぐらい書いています。だから、立教はデューイの DDC (Dewey Decimal Classification) を使って来ました。思想そのものはいいんです。ことに戦前は外国書がほとんどでしたから、外国書の標準分類に精通しそれに準拠して使っていればいいということだけでずっと来ていたんです。ところが日本の本が増えて来た昭和三〇年ぐらいになって、DDCで和書に数字を与えると、とんでもないことになるんです。日本文学は910でいいのに、DDCでは895.6までいかないと入口にたどり着かないんです。そしてその中を細分類していくわけですからね。そういうこともあるから、和書に使用する日本十進分類法 (NDC) を使ったほうがいいというのは当然です。

立教でもいいかげんにNDCにしたほうがいいんじゃないかという声は以前からあったんです。僕もそうでし

た。スバックマン先生時代からずっと、歴代の館長先生を見ると特に鶴川先生はDDCが大変好きで「変えるのか？」といつもおっしゃってました。図書館の中でも数としては圧倒的にNDCにしたほうがいいと言っただけで、それを变えるには各学部の図書室の本も、この図書館〔本館〕を経由して分類づけをしていましたから、変えられては困るという声も当然あるんです。それで結局DDCをずっと続けて来たのです。法学部は自分たちでやるからと、研究書の分類に相応しいUDC (Universal Decimal Classification) を応用した独自の分類表を作っていたから、立教の中には三つの分類表があって、同じ本でも三カ所で違う番号がつけます。

——一つはDDC、一つは法学部、もう一つは？

小関 NDCです。

——NDCはその時点ですでに使っていたんですか。

小関 使っていません。

——その時点では二つですね。

小関 二つです。

——法学部ができる前はDDC一つで、法学部図書室ができたことによって法学部用のものができた。

小関 そうです。

——その後NDCが入ってきたということですね。

小関 大学図書館も含めて九割近くがNDCを採用して

います。あくまでも本という物理的なものの分類で、どこに置くかです。本の中に主題が二つ、三つあった場合は本をあちこちに置くわけにいきません。一番当たり障りのないところに置きます。同じ本でもA図書館とB図書館が違う番号、ということもあり得ます。

そういうことがないように、時代がたつにしたがつて全国的に書誌を統一して、分類はNDCで一括で付与して、それを流用すれば、どこに行っても使えると。考え方としてはあつたんですけど、なかなかそこまでは……。書誌の分類と書架の分類はなかなか相いれないところがあります、特に研究的な大学の中では、完璧に分類するとなると十進法分類だけでは叶いません。ですからたとえばDCの宗教の部からキリスト教へ、その部分を膨らませて専門化する。聖公会なら聖公会のところを展開することです。私はそうすればいいと思います。

分類のことは一九九〇年代までいかないと立教の中で解決しなかったです。解決するのはオンラインで情報を全部もらえた上に、そのシステムに立教もようやく乗ったところまで引きずります。

僕が副館長をやっていたときに館長が自然科学の加藤〔秀生〕先生でした。ドライでしたから「こちらでいろいろ考えなくても、よそのものをもらった方がいい」とおっしゃっていました。そんなこともあってこれは長年

の大きな宿題でした。今は解決してうれしいです。

——法学部図書館室ができたころに戻りますが。

小関 昭和三四年です。

——法学部は完全独立とはいえ、図書館員が行って仕事をしていたと。

小関 そうです。

——所属は図書館で。

小関 名前も法学部図書室でなくて、法学部図書管理室でした。何をするかと思つたら、「専門的な分類はわれわれ〔学部〕がやる」ということでした。法学部は予算をたくさん持つていました。その処理とか、本屋さんからの受け入れ、収書は法学部でやりました。それを担う事務的なことをやるのは法学部にいる安田さん、風巻さんという女性でした。

われわれはデータづくりでした。著者が三人いるけどand othersにするか、一、一、二ととったほうがいいか、サプタイトルがついているけどどうするか、エディションとプリントが違うけどどうするか、そういうことは大事ですから。今はコンピューターでやれば簡単ですけど、昔は12×7.5cmの目録カードに全部書いて戸籍簿や住民票みたいなものを作るとというのが図書館員の仕事です。

——分類番号は学部のほうで付けて、書誌情報について

小関さんたちが作成していたと。

小関 そうです。

——学部の図書室に図書館職員が入ったのは法学部が最初となるんですか。文経理はそれぞれ副手みたいな人が読書室についていて。

小関 いましたね。

——図書館員は行っていない。

小関 学部出向みたいな形で行ったのは多分いいですね。

——法学部が最初ですね。

小関 そうです。いないと思います。

——位置づけは図書室でなく、図書館だったということですね、法学部に関しては。

小関 図書館の命令系統にはないです。全体の中の予算とか、大学としての拘束は、図書館に近いからそういうことはあったんでしょうけど。例えば出勤簿の管理から図書館の中のルーティンのことに関しては及ばないです。僕と鈴木さんのときは図書館員で出向しているのですから、図書館の共通業務があればやりました。安田さん、風巻さんは全然図書館の管理下ではなく……。

——小関さんと鈴木さんの出勤簿は。

小関 こっちです。

——図書館で認め印を押していたと。

小関 そうだったと思います。

——図書館員と法学部の職員とで混在してやっていたということですか。

小関 そうです。今はそういう部署もあるんじゃないですか。それが昭和三四年で、私のスタートです。法学部の仕事そのものはその後、連綿と続いていって、ついに社会科学系の図書館を経て、今は一緒になりました。翌々年かな、僕はこっち〔本館〕に帰ってきます。最初は法学部図書室ができるまでという約束だったんだけど、僕は気乗りがしなかったんで、「図書館に戻れませんか」みたいなことを道村さんによく言った記憶があります。実際にこちらに帰ってきたのは一九六一年だと思えます。整理課に移って、和書の整理をやりました。

丹下健三氏設計の図書館新館

——丹下図書館ができた直後ということですか。

小関 そうです。丹下図書館はできたのが一九六〇年です。

——一二月です。丹下図書館を造る過程は全然……。

小関 仮にこっちにいたとしてもまだ下つ端で何も……。ただ、本の移動作業はやらされましたけどね。昔は業者に頼む余裕もなかったんでしょう。毎日みんなで力仕事をして、いろいろなところに運ぶ。書庫があったのをつぶしてしまいましたから。

——)の〔Mather Libraryの〕裏にあった。

小関 そうです。書庫がありました。そこにあった本を持ち出したり、新館ができたら持って返ってきたり。ライフスナイダー館、タッカーの三階まで持っていった記憶があります。僕は丹下図書館ができる過程も含めてですけど、断片的に後から聞かされただけで内容はよく分かりません。丹下図書館はしばらくして、何で評判が悪いんだろうと思ったこともありました。

——当時、新しくできたものを見られてどう感じましたか。

小関 素晴らしかったです。建築家が造るものなので機能的でないなど感じたのは、一週間もすればいろいろなところで出てきます。丹下さんだけでなく、著名な建築家がいっぱい図書館を造っています。全部が多くの場面で受け入れられているかという点、必ずしもそうではない記事を散見するので、丹下図書館もその類かと思っただけです。確かに関連記事はメモしてました。確かにルツクスはいいです。丹下さんの考えでは、狭いキャンパスの中からアプローチ、広い階段を上つてくるとバツと広がって、世界が変わったような感じがする。丹下さんのコンセプトの中にそういうものがあるんです。ここから図書館だという気持ちで入るんだ、と書いてあるんです。本当にそうだと思うんですが、いろいろ……。

例えば箱を造って、真ん中に書庫がありました。本は二〇年たつと倍になるといわれます。捨てない限り、あふれてしまいます。どうしようもなくなりません。立教ではそうなった時期は早かったのです。それから上に行くにも下に行くにも、全部階段を上り下りしなければいけません。サービス・カウンターが上にあり、下に書庫があるわけですから、本を探すにしろ、何をするにしろ、小さな階段を上り下りするんです。動線が全くできていない、発展性がないんです。箱だから機密性があるのかと思ってみると旧館から新館に行くのに特別に廊下があるわけなし、書庫の中に金網で仕切ったような通路があつて、一番大事な湿度が守られていないので本が傷むだけ傷んでしまうんです。そういうことで「あれ……？」と思いました。

番匠谷館長の話を聞いてみると「いやー、君。トイレの便器の数を決めるだけで会議を何回やったことか」と。それにしても使い勝手が悪いんだなと思つて、ギャップが大きかったですね。僕だけでなく、図書館外の人たち、施設課の人たちも含めて、いろいろなところで評判がよくなかったです。

そんなことをずつと思つていたものだからある時、建築史家の米山勇さんに、「丹下さん設計の図書館を僕のところで造つたんですよ」と言ったら驚いてました。

「学内では評判が悪くて、新しく図書館を建てようかという話も出ているけれども、壊すのは大変なんでしょうね」と言ったら、丹下さんは自分で造った過去のものはこだわりが全くないそうで、どうぞ勝手にしてくださいというような姿勢なんだそうです。自分の伝記を書かれるのも好きではなかったらしいです。

そんなこともあつて、壊されてしまつていいのかなと思いがちだけど、外から眺める姿は最高です。結婚式場でも何でもいから残しておいてくれればいいなと個人的に思っていました。実際にはちゃんと伺いを立てたと施設課の人が言っていました。「丹下さんの建物をどうしましょうか」と言ったら、同じような答えだったそうです。現物をちゃんと残しておいてくれたのは本当に良かったなと思います。

見学者は多かったです。自由に本を直接触れるオープン・スタイルです。昔はこの大学に行つても、大きい図書館は出納式で、メモに書いてお願ひする閉架式が主でしたからね。オープン冊数は五万冊かもしれませぬけど、新刊書を並べるだけでもずいぶん喜ばれました。そういう点でもよかったです。三階の見晴らしのよい開放感は格別でした。今まではレンガ造りで、どちらかというと暗い狭い感じに押し込められたような雰囲気の仕事場から、そこに出ると生き返つたようになりました。こ

れも合格です。ただ使い勝手は確かにいいとは言えなかつたですね。

——閲覧カウンターから書庫に下りていくのに狭い階段を、身を縮めて上り下りしたと。

小関 潜水艦みたいな。すれ違うのにこうやらないと。——あのへんを見ていると大変だったろうなと思うんです。

小関 一日何回上り下りしたか、壁に正の字を書いて貼っていました。サンシャイン60ができたときに、階段は何段あるんですかと聞いた記憶があります。「きょうはサンシャイン60の上り下りを三回した勘定になる」という話題になったこともあります。

もう少し使い勝手がいいようにと施設課の人も考えてくれて。外付けでもどこでもいい、本の上げ下ろしだけでなく、人間が一人乗れるだけでもいいんだけどエレベーターをつけられないものか、とか。そういう話題になつているところは、立教は貧乏のどん底の、給料だつて上がらないような時代になつているから、そんなところにお金を使うよりも、機を待つて新しいものを造つたほうがいいんじゃないかなど、いろいろと考えてくれたみたいです。

——閲覧カウンターのところにある本専用の小さなエレベーターは最初からついていたんですか。

小関 あれはついていました。やっとブック・トラックが一台入るだけです。ときどき館員がいたずらして乗って「ばあつ」なんてやってました。足元の書架には三〇万冊ぐらい入るんですけど、固定書架ですから五、六年務めるとどこに何があるか自分たちの頭の中に入って、「それはですね」とバツと行けるぐらいの範囲というのには実は気持ちいいんです。ただ、仕事はつらかったですね。

また、向こうの丹下新館とこちらの旧館との連結、階段で五、六段の上下ですが、あの連結がすごくいいという評判を建築家、専門家から聞かされたことが何回かあります。また、古いものと新しいものを同じレンガで造って建てただけで、その連携がうまくいっていると。

二、三人の建築の好きな人から言われました。

旧館のレファレンスをやる部屋が落ち着いていて、新館とは全く違った雰囲気でしょう、そのへんはすぐよくかったですね。学生に聞いてみると落ち着いて勉強するのはこちらの……。

——参考室。

小関 それが一九六一年です。その頃、僕は和書係に配属になって、結構長かったです。一〇年ぐらいかな。一九七四年にレファレンスへ行くから、一二、一三年が和書係です。中心になっていた人は新井茂昭さんでした。

——新井さんは分類係長のようです。

小関 物腰が柔らかくて、静かな人でした。その人は自分で分類に専念してました。データを作るのは目録係ですけど、それを徹底して勉強させられました。武藤さんはまだいらして、勉強しろと言うから、よく講習会、研修会に行きました。そのときの財産というか、一つ一つ物理的な文献から本当に必要な正しい情報を利用者に提供できるようなデータづくりをするという目録の技術を徹底して学ぶ機会だったような気がします。

参考係という仕事

小関 その次に配属されたレファレンスは、相談係みたいなものです。今はラーニング・アドバイザーという名称で大学院生がやっているようです。学生がどういう勉強をしたらいいか、こういうものを調べるにはどういうツールを使ったほうがいいか、アドバイスする、提供する、それがレファレンスです。アメリカから入ってきた日本の新しい仕事のスタイルです。それに目録作業の技術はいろいろな場面ですごく役に立ちました。それが次の十何年です。

——名簿から見ると一九七一年に参考係になっています。一九七四年に係長です。

小関 では和書は、ちょうど一〇年ぐらいかな。

——一〇年間は、和書係をされていたということですね。参考係はその前からあったんですか。

小関 ありました。図書館は本の貸し出しが主で、大学でも、公共図書館でも、どこでも同じです。本を書庫にしまつて大事にしておくことです。それだけではないけないんで、もつと利用者が何をしてほしいか、何をしたいかという意向をくんで、どんな図書館のほうから応えていくようなスタイルに、レファレンス・サービスという名前をつけてアメリカでやっているという仕事です。

戦前から日本でもちよつと導入されていましたが、大学図書館のどこでも本格的にやるようにという目的でリードしたのが私立大学のICUと慶應にいた長澤雅男、井出翁という二人です。慶應の図書館学科の一期生の人達です。外国に留学し、帰国後は積極的に日本におけるレファレンス・サービスの向上のために啓蒙と教育を続けられました。

そういう勉強の場に、現場の職員を参加させてレベルアップしようという旗振りをしてのが武藤さんなど各大学図書館の事務長クラスの人たちなんです。レファレンスだけでなく、目録の分野でもそうですし、分類の分野でもそうです。最初からレベルの高い図書館員なんていませんからね。現場の人をどんどんそういう場に

出させて、切磋琢磨させて育てようという研究会、分科会が私立大学の図書館協会の中で昭和三〇年頃から先進的に行われていたんです。

国立もあるし、公立にもありますが、レベルが全く違つて、私立大学はそのトップを切つていたんです。そんな環境の中で、レファレンス・サービスの実践において、施設面でも備えているツールの面でもスタッフの面でも——スタッフの面は後発で加わつたんですけど——、立教は全国的に見てかなり質の高いレファレンス・セクションに昇華したと評価された経緯はあるんです。

その頃は笠井〔剛〕さん、石田〔弘〕さんたちが、「素人なんだけど」と遠慮しながら参加しては、長澤さん、井出さんを中心に……、年齢もそんなに違いがありませんから交流をもちながら活発に実践したと言えます。私立大学のレファレンス研究分科会というんですけど、そういう人たちの連絡はすごく強いですね。自分たちでできなかつたらよその大学にも聞いて学ぶ、向こうの大学から問い合わせもある。よく早稲田と慶應は対抗心が強いと言われるけれども、研究をするための情報の提供はすごく協力してやつていて楽しそう。いい仕事だったように思います。立教もそういう意味で評価がすごく高かったです。

——参考係ができて、参考係長に笠井さんが来るのが昭

和三九年なんです。

小関 参考係とちゃんと独立したのは、新館が建った後に、旧館が整備されて独立して使うようになったときです。

——法学部図書室から本館に戻られたとき、この上は参考室でなくて……。

小関 僕の記憶ではまだオープンもしていないような、雑多に置いてあったように思います。それを、武藤さんをはじめ、せっかく場所があるんだからということ、参考、レファレンスしようということで、そこに辞書などを持ち込みました。スタッフも閲覧係は九人だったと思います。丹下図書館は仕事スペースが狭いでしょう。そこで閲覧の全体の業務は課員全員でルーティンで行なうということにして、その中の一人がこちら、旧館に来る。カウンターに四人が座り、レファレンス・サービスを完全に独立オープンという体制にしたのが昭和三九年だと思っています。笠井さんがそのときに係長。僕はまだ下の事務室でした。

——係としてちゃんとできる前から徐々に参考室、レファレンスをやりつつあったと。それを追認的に後から制度化したということですか。

小関 まあそうですね。施設の面ではもうできあがっていました。スタッフはカウンターがあつて、参考業務は

ここで行なうと揭示していました。

——旧館だけのときは、のちのレファレンス・カウンターが閲覧カウンターだったわけですね。

小関 そうです。

——レファレンスもあそこで同時に受け付けていたと。

小関 レファレンスという大規模なものではなかったですけど、あそこでよろず……。

——相談を受けていたと。

小関 そうです。

——新館ができて、新館に閲覧カウンターができて、このメンバーが順繰りに旧館の旧閲覧カウンターをレファレンス・カウンターにしてレファレンスを受けていたという感じですか。

小関 そうです。

——参考係が独立したのは昭和三九年、一九六四年ですか。参考係は閲覧課の中の一つの係でしたね。

小関 課の中の一つの係です。閲覧課があつて、閲覧係、参考係です。当時学部は学部で独立してたくさん本を持っていましたけど、先生によつては、反応がいいからというのでここ、参考係にずいぶん足を運んで、これを探しておいてくれ、ビブリオグラフィを作ってくれとか、いろいろなりクエストがありました。特に英文科の先生が多かったです。辞書の田桐先生はしよっちゅう

来ていましたね。川崎淳之助先生とか、福田光治先生とか、よく見えて、僕らも勉強させられました。

——教員のレファレンスみたいな仕事もしていたということですね。

小関 そうです。僕らも勉強になるから、先生方が来れば怖いけど、やってみると普段使わないツールもひもとくし、楽しみでした。一度成功するとまた来てくれます。コピー・サービスは、今だったら電話一本でとれますが、実施しているところが当時あまりなかったんです。もう少し時代が下がるとイギリスの British Library から取り寄せ可能な方法も出来、大学院生などにもよくサービス出来ました。今ならもっと簡単に出来るでしょうけど。

図書館員にとってあのセクションは大事だとずっと思っていたのですが、今度、立教の新図書館が出来て、それが日本図書館協会建築賞をもらい、図書館雑誌に載ったその紹介記事の最後にちょこっとコメントが付いていました。もっと職員、図書館の専門のスタッフが前に出て学生と接したほうがいいのではないかと耳の痛いことが書いてありました。

明治大学の旧館でもそうでしたが、僕が次に行く逐次刊行物係の業務から得られる生の新しいデータが、特に教員向けのレファレンスに有効なんです。明大では参考

係と逐次刊行物係はほとんど密接した場所になって、課長が兼務する状態でやっていてすごく評判がいいのを学んだことがあります。

——新しい図書館だと、図書館の職員が表に出ていないですね。

小関 これは時代の流れでしょうけれども。昔も大学院生を図書館のアルバイトとして使うことはよくありましたが、しかしレファレンスとか、相談係に使うというのは……。

例えば法律を学んでいる人に化学の質問があった場合は答えられないではないですか。自分がどういう先生に習って、どういう勉強をしたかによって、いろいろあるものの中でどういう使い方をしたか、個人流の勉強の仕方、アプローチの仕方ができてるではないですか。そういうものを押しつけるような形の時も……。それはそうですね。個人差があるかもしれないけど、どうしても傾向として支障が出てくるかもしれない。

だからもっと初歩的なレベルかもしれないけど、図書館員から、こういうものもあるし、こういう方法もあるし、どれが一番いいか、と向こうに選択させるような出し方でやったほうがいいということ、昔の主流だったんです。

今は学生の勉強のスタイルが、一人でこつこつやるよ

りも、全体で話しながら、ネットで調べながら、多角的なものになっていくから、なるほどなど思うようになってただけ。僕らの時代は大学院生にお願いするのは消極的でした。今はどこに行っても院生の出番ですね。ラーニング・コモンズみたいなものがあつたり。

分散と集中

——学部の図書室の話が出ました。ある時点、先ほど出てきた昭和三〇年代後半ぐらいから名簿上、それまで図書館は図書館員だけだったわけですけど、図書館の組織の中に学部の図書室の人も名簿に入るようになるんです。制度が変わったんですか。

小関 変わったんです。ある年から庶務課所属だったのがガサツと図書館員という形で、それこそ名簿上、なりましたね。この年というのはどこかで見た記憶があるんですけど、何年ぐらいですか。

——名簿上は一九六三年、昭和三八年です。

小関 ありましたね。それも全部一緒に来たかどうかはどうでしょうね。頑として自分たちのところで、というところはあつたかもしれませんが。

——昭和三八年は各学部みんなが図書館に入っている？

文はどう？

——文はないです。経済学部、理学部、社会学部、法学

部があります。

小関 制度上、突如として図書館員の数が多くなつたという感じですね、数の上では。交流が実際に始まるのはもつと後になってからですね。

——実態としてはそんなに変わらなかつたということですね。

小関 ええ、その当時はまだ。自然科学系図書館員、人文科学系図書館員という構想が仲間うちの話題の上でちらちらし始め、学部図書室の問題が始めたのかな……。記憶が定かではありません。

——図書館内でそうすべきだという議論があつた上ではなく。

小関 そうではないです。古くて新しい問題だったんだけど。図書館案内のリーフレットがあつて、図書館の貸し出しの仕方、レファレンスの受け方などがいろいろ載つてました。その中に学部図書室案内というのがあつたんです。「あなたはここに行くことができますか」というタイトルです。僕が書いたから覚えていきます。

——図書館員だつてそこに行き着ける人が少ないと思うぐらいに、こんなに狭い学校の中に三十何カ所かの図書室、読書室があつたんですよ。それぞれ貸し出しが違う、退室時間が違うんです。コピーはすぐにとれる、とれないとあつて。それが三十何カ所あつたんです。これではい

くら何でも、という声も上がってきました。図書館は所蔵する図書情報を扱うセクションになるのがいいのではないかと声もありました。そのようになるまでが大変で、昭和二〇年代、立教大学は戦後、規模が大きくなり、レベルの高い研究志向の大学にしようという方針で学部と学科が増えてきました。それに付随して学部にも図書室の類が作られました。必然性として分かりますよね。自分たちの勉強するところ、研究するところが欲しいんです、予算も、場所も。

しかし立教の何億円という金で買ったものを、こんなに細切れにして持っていることだけですか、という問題です。仮に物理的に解決しても、みんなで共有するにはどうしたらいいのか、という問題があります。ものは分散してもいいけど、利用するための手がかりとして情報は集中したほうがいいと。逆に、所在情報はしっかりと共有して、物は一カ所にあつて誰でも常に使えるようにしておいたほうがいいという考えです。この分散型と集中型というのは長らく古くて新しい問題で、各大学の中ではずっと続いていました。その典型的な分散型の例が立教だったんです。特に昭和二〇年代ぐらいからは。(田村信吾「大学の研究教育体制と図書館組織―立教型分散制の軌跡」『立教大学職員紀要』(第5号・一九八七)参照)

研究会や外部の図書館を見学しても、必ずテーマとして上がる問題でした。立教の中でもかなり緻密に研究的に取り上げて、現場で照らし合わせて考察したすぐれた論文が二つか、三つあるんです。田村信吾さんは経済学研究科の出身だけど、図書館の整理課長をしていた時に分析的な論文を書いています。経済学部図書室に長く出向された宮沢泰さんも、実務面から取り上げて、解決策を提起しました。

そういうものが声として上がってくるし、やがて本館と学部の人事異動も行なわれるようになり、コンピュータ時代の先生方も研究スタイルが当然変わってきていますし。その延長線上でやがてDDCからZDCになった事実も加わったりして、今のようにな一本化になったのではないのでしょうか。ちょうどそうなりつつある、うまくいくなという時代に僕の四四年間の立教生活が終わったということです。職人時代、僕にとってすごく楽しい時代でした。コンピュータは本格的にはまだ入りませんでした。ちょうど辞めるころにやっと入ったぐらいの感じです。

図書館の中のシステム化、いろいろな協力関係はコンピュータの基盤がないと駄目だと分かっていましたが、他大学と比べて立教は最後の時にその世界に参加することが出来ました。それが今のように発展したのですね。

僕らの職人の図書館員時代から新しい情報サービスの図書館員になった境目のところで辞めたのです。そういう意味では両サイドを体験した職人だった気がしますね。

——一九七三年に図書館建築小委員会というのできているわけですけど、どういう経緯ですか。

小関 につきもさつちもいかない、物理的に。

——書庫が満杯で。

小関 学科もそれぞれそうでした。だけど際限なく本は入ってくると。何か建てるためのお金はなく、どうしようかというところで。図書館の中でも、セクションから何人かずつ集まってい知恵を出し合おうという形の建築委員会です。保存書庫を造ってくれというところまで行き着いたわけではないんだけど。建築委員会は第一次、第二次、第三次と図書館の中に何回か作られたと思います。

——図書館の中の委員会ですね。

小関 中です。どこかで建築委員会という名前が出てきたら……。例えば保存書庫を造るときも学内に専門的な建築委員会を作られていたんではないかと思えます。そうでなくて、図書館内に建築委員会が何回か作られています。例えば将来計画委員会とかに名前は変わっても、物理的な窮状の解消とシステム化を早く実現して効率よくしようという二つの大きなテーマを抱えて何回も知恵

をしばり出しました。館内の委員会です。

差別問題

——参考係になる前の段階の時期に話を戻したいんですけど、一九六八年、一九六九年に紛争が起きました。図書館はそれほど影響を受けなかったんですか。

小関 立教大学は機動隊を入れませんでした。だから続いたということもあるけど、その時期はよほどぎりぎりするとき以外図書館は閉館しない、開けばなしということをやりました。学部長室を占拠されたりというのはありませんね。僕らも当番室に泊まりました。夜中に目が覚めて外を見るとヘルメットが動いているような……。そうでなくて月の光か蛍光灯のあたりだったり、何回か泊まりました。図書館の中を荒らされたことは一切なかったです。そういう記憶はないです。

図書館として一番つらかったのは、もう少し先の一九七四年の「部落差別」問題です。僕らにだけじゃなくて、図書館界に対しても、認識不足の指摘がありました。館長が井上幸治先生の時代です。井上先生は秩父事件の本を書いて、専門家でもあるわけですからつらかったと思います。先生は図書館員と共に先頭に出て、問題を提起した学生や部落解放同盟の人たちと教室で数度の確認会がもたれました。その発端は本をその内容から検索する

用語、即ち件名に「特殊部落」という用語が入っていたんです。

——「特殊部落」ですか。

小関 「特殊部落」です。そこから始まったんです。僕は国会図書館の「件名標目表」を自動的に使ってたから、もろに現象としては明らかになってしまいました。

——分類は番号を振るわけですけども、件名に「特殊部落」というのをカードに入れていたということですか。

小関 うちでは本を探す手段の一つに件名を利用する方式をとっていて、その件名を付与する道具には国会図書館作成のカードを使っていますので、国会図書館が作っている件名標目表を自動的に使っていたんです。例えば「特殊部落」を件名目録で調べるとその関係の本が五冊あるのか、というわけです。

——当時はカードしかないから。カードが何種類かあって、一つの本について著者名で引くか、主題別の件名で検索するか、ということですね。

小関 一冊の本でも複数の主要なテーマを含んでいればそれぞれ件名をつけてカードを作っておけば有効です。その中に「特殊部落」という言葉を使ったものがあったということ。それを無自覚に使い続けているのが問題でした。

——立教が使い続けたのはなぜだったんですか。

小関 カードを利用するのは効率上の問題です。しかし、ついていたものをそのまま使っていた、指摘されたから訂正・削除した、と事務的な処理で済む問題ではない、国民的課題である部落問題について理解してないではないか、ということでした。

——では国会図書館で同じような問題は起きたのですか。

小関 国会図書館の中に同期の友人もいましたので、適宜情報は聞いていましたが、詳細は記憶に残っていません。

——立教だけで特に問題になったというのはどういう経緯なんでしょうか。

小関 立教だけ特に、ということではなかったと思います。同じ標目表を利用している図書館でも起こったのを聞いたことがあります。ただ自分のところの問題に集中していたので、外のことまでは考えが及ばなかったのが正直なところ。それだけショックが大きかったのだと思っています。

——結構長引きましたよね。

小関 長引きました。確認書、館長の回答書、対話集会、部会、研修会、総長の所信表明と。

——一般教育の非常勤講師の発言もその後続いたりして……。館長が率先して皆さんで解放同盟と当たられて。

小関 館長だけでなく僕ら全員です。

——部落解放同盟とのやりとりだけではなくて、館内でもいろいろ議論とか、会議は相当あったわけでしょうね。

小関 もちろんありました。館内の委員会、関係書の収集、外部研修会への参加等々、大学紛争とちよūdど時期が同じで。井上先生にはもう少しやってほしかったし、先生もやりたかったのかもしれないんだけど、辞められました。その後の館長は、佃先生と尾形先生、総長兼務でしたね。

——専任の館長がいなかったですね。

新座保存書庫建設の経緯

小関 皆さん、疲れちゃったんだろうね、大学紛争などで。でも尾形先生はすごい人だと思いました。先ほどのパンフレットにも尾形先生の力のことが載っています。ご存じないですか。

——欧州政治思想史ですね。

小関 大学行政に力があって、説得力もあって、でも口がきついです。このへんに本が落ちたのを何かの拍子に上ったりすると「小関、何やってるんだ、ばかもの」と。だけど根はすごくいいです。法学部の図書室で僕が鈴木君と二人で仕事をしていると、「いまの図書館では、おまえらも苦労するな」と。その延長線上なのかなと思

うんだけど、鶴川先生が図書館長になって、その時代に新座保存書庫ができます。その騒動がすごかったときに尾形先生（総長）の決断があつて。将来的に立教の方向性について、ちらりと伺ったことがあります。感激していた矢先に先生が倒れてしまいました。あと五、六年倒れなかったらと思います。残念でした。まだそんな年ではなかったんですけど。

——保存書庫の発想というのは館内から出てきたものではないですか。

小関 そうではないです。館内は建築委員会、将来計画委員会、どうしようこうしようです。どれもお金に突き当たりますよね。本部でもいろいろな案があるんじゃないですか？ 何とか東武のあの新座の敷地を使わなければいけない、お金はない、大学紛争を引きずっている、いろいろなことがあるんじゃないですか。図書館からは、本をどうするんだと。そのときの決断として……。これです。『立教大学図書館新座保存書庫 書庫文献案内』。新座保存書庫のテーマが持ち上がったから学内外で取り上げられた文献を全部この中に載せたいです。これは来ていませんか。

——これはどこかにあるかもしれません。

小関 この中にもありますが、尾形先生のあいさつの中から、将来立教が持っている財産を守る、保存するとい

う意気込みがすごく伝わってきました。一般の図書館員の中でも、何であんなところに造って……、そうでなくても学生は「キャンパス移転」で神経がピリピリしているではないか、と。そんなに高い金を出してやるぐらいなら、という疑問はどうしても出てきます。それを頑として押し切ったと。今になってみればあそここのキャンパスをあんなに上手に使っているではないですか。

——尾形さんが保存書庫を造るとするのは政治決断というか、総長決断みたいな。

小関 そうだと思います。公式には伝わってませんが、当時の副館長は多田二郎さんですね。多田さんは昔の自分が務めていた図書館を造った鬼頭梓という建築家、図書館をメジャーなテーマにして、大学の図書館に造詣の深い人についての情報を、総長に流したかもしれないが、多田さんは「そんなことない。全部自分で調べて、ある日突然鬼頭さんに頼む」と言った、と。

——尾形さんが？

小関 尾形さんからそう聞いたと。それは残っているわけではないが。言葉としては言われたそうです。鬼頭さんは世間的には知られている人ではないですが、図書館の世界では、関西大学もそうか、同志社女子大の図書館もそうかと、多くの作品があつて、ユニークで立教に合うようなレンガ造りを上手に使うんです。同志社女子大

の図書館の発想は、立教も敷地が狭いから、使えるのではないかと思えるような例です。そこに芝生があるでしょう。この地下を全部図書館にしてしまおうと。キャンパスを歩いているといつの間にか、図書館入り口が見えてきて、ずっと入って行くとそこは地下一階で、図書館なんです。しかし地下一階で周囲が覆われているかというところでなくて、周りを全部広い空間にしているというのです。そんな設計です。そういういい図書館をいっぱい造っている人です。その人が造るといいうから、それはいいなと思いました。僕は館内の建築委員会で、ずいぶん会議をもつてやりました。やっている間に僕も半信半疑で、何であんなところ、新座キャンパスにと嫌になったこともあるんです。しかし、建物自体は立教の宝として本の保存というか、本を維持するためのことをまず一番によく考える、次にそこで働く人、スタッフのための環境づくりを二番目に考える、その上で閲覧などのサービスを調える、要するに、いい条件でもつて本をこれから未来の立教の中心に残るような建物を建てると言っていたらした。

——尾形総長ですか。

小関 いや、鬼頭さんです。これはいいなと思いました。尾形さんも立教にいらしたときに同じようなことを言っていました。これは鵜川先生もときどき言っていました。鵜

川先生は「戦前の英語の文献でこれだけきちんといまだに残っているのは立教で、小さい大学だけど、外国の先生が多かったせいもあるんだろうけど、こんなに持っているところはない。研究者もそれを目指して来校するケースがあるんだ」と。将来どこにもなくて、立教でしか扱えないようなものをああいうところに……。キャパシティが七〇万冊だから、そこにいっぱい納められればいいんではないかとおっしゃってました。

これを機会に分類をNDCにして、保存書庫をDCの図書館にすると。その中でいらぬもの、重複したものは廃棄して、DCで分類した資料のいいものを、いい状態で収納する。一番いいチャンスだと「職員紀要」に書いた記憶があるんです。そういう意味では尾形先生、鬼頭さん、鶴川先生たちの思想がかなり強く一致したのかと思います。しかしすごい反発が館内外、特に学生、院生から起こりました。一つのことを生み出すにはすごい反発があるんだと……。

——建築委員会、将来計画委員会とか、いろいろと図書館内で検討してきたわけですけど、お金の話を別にすれば図書館としてはそれまでどうしてほしいと思っただけでしょうか。

小関 現状では、ものを三十何カ所に置いて、利用者があっちに行きこっちに行きではね……。少なくとも妥協で

きるところで、自然科学系、人文科学系、社会科学系の図書館ぐらいに統合し、学生が中心に利用するような図書は本館に揃えておけば。狭いキャンパスの中でもそのぐらいたらばできるんじゃないか、みたいなことにはだいたいの一致点として、答えとしては出てきてました。それがこういう時に出始めたからうれしかったです。

——当時すでに書庫は満杯ですね。

小関 そうです。

——図書館としては、自然科学系とか、学系の図書館に分散させようと考えていたわけですか。

小関 ものは、どこかできれば一カ所のほうがもちろんいいと。自然科学、人文科学ぐらには必要最低限……。例えば化学の本を社会科学系のところにおいてはどうしようもないです。それと同じような形です。その学部学生、大学院生が主に使うようなものは、学系の図書館でいいんではないかと。その所在情報をどこかで集中して作成しお互い利用できれば、妥協もできるし、実現可能でないか、お金もそんなにかからないだろうなど。そんな考えでしたね。それは結構うまくいったのかなと。

——分野の問題というよりは、委員会を何回も立ち上げているということは物理的に満杯になりつつあったんだろうということですか。

小関 手段はいろいろあるんです。私大でも、国立でも

いいんだけど、理想的な案としてもありません。協力保存です。A大学とB大学とC大学となるべく多く集まって、その中で重複して何年か一回しか使わないようなものはどこが持てばそれぞれ個別の大学では持たない。ここの図書館は雑誌を全て持つが、ほかは持たない。そのような相互協力の一環として保存したほうがいいんじゃないかという考えもあるんです。

多田さんはそれをすごく主張しました。新座保存書庫を単独で造ってしまうよりも協力体制をつくりたかったとずいぶん言っていました。そのほうが効率はいいと言っていました。でも大学はそれぞれ性格が違うし、理想では分かるけども、という感じです。だから立教の中では保存書庫には使用頻度の低いもの、学部にあふれているものを持つていく、そうすれば重複したものは捨てられるし、また、普段あまり使わないコレクションのようなものを新座に移せば自分たちのスペースは空くし、ということになります。

二〇年たつと倍になるのが現実です。将来計画委員会も、建築委員会も、先立つものはお金の問題です。学系ぐらいいまではまとまって、重複したものを新座に持ってきて清算すれば何とかいまのキャンパスに納まるかというところが、いつものだいたい結論に到達していた気がします。

——三十何カ所でなくて、せめて人文科学、自然科学、社会科学ぐらいいに分けて持ちましょうぐらいかという感じですね。

小関 それは実現可能でないかと、多くの関係者は思っていたんじゃないですか。

——お金もなければ、建築場所もないということで、なかなか実現しなかったと。

小関 ここまで来てしまったという感じですよ。

——保存書庫に一気に飛んだと。それは尾形さんの。

小関 そう思います。一語で表現すれば緊急避難です。——あのときは新座の校地に何かを造るということだけでも中核派が大騒ぎをして大変な時代でしたね。教員たちからも反対論はあったんですか。

小関 反対も多かったです。

——それはどういう文脈で……。

小関 図書館では運営協議会が年に何回かあって、館長所管分という全学共通の予算の奪い合いみたいな会議があるんです。そこが図書館の行政を管理する場だったのですから、「あんなところに持つていくのか」と。先生方は、使い勝手が悪くなることには真剣になって。例えばこれが欲しいと言われたらすぐに持つてこられるのか、これを見たいと思ったときはすぐにそこに行けるのか、貸し出しができるのかとか、そういう利用面のほう

での反発は強く出ていました。もちろん大学院生からもそうだけど。図書館内でも、かたくなに駄目だという人も多かった気はしますね。

——図書館員の中にですか。

小関 何だかよく分からないんだけど。

——理由は何ですかね。

小関 僕は最初に赴任したんだけど、勤務条件はつらいんです。あんなところへ行くと鬱になっちゃうではないかと思うような、何もないところにポツンとあって風が吹けば……。最初は小林真理さんが一緒でした。診療所の看護師さんは会うたびに「小関さん、大丈夫ですか」と心配して声をかけてくれました。

——それもあるでしょうね。職員にしても、教員にしても、あの頃は池袋だけでしたから、志木に行かなければならないというのは精神的な負担でもありましたね。

小関 都落ちみたいな考えがあつて。

——一九八〇年はまだ不便なところでした。周りにお店もないし。

小関 本当に何もなかったです。それで、図書館の中で順番に交代して行こうという暗黙の了解みたいなものがあったので、二年ずつお互いにたすき掛けて異動しました。しかしその後、あのとときの反対発言は何だったんだというぐらい、希望する人が結構増えてきましたね。

——新座保存書庫を造るときに反対論が学内からもあったという話がありました。一九七九年、ちょうどこれを造っているあたりのときに図書館委員会を図書館運営委員会に改組したという……。

小関 単なる名称の変更です。

——特にリンクしているわけではないんですね。

小関 図書館運営委員会は学校側の名前です。もしかすると運営委員会規則などを見ると、その中身や具体化は少し変わっているかもしれませんが実質的に同じです。前の名前で言っていました。

——新座保存書庫が一九八二年三月にできます。ちょうどその年に参考係から運用課に……。運用課はこの年に新設されたわけですね。

小関 そうです。「新座保存書庫課」、「新座何課」というよりも、全学、全図書館的に使うものだから、名前としてはもっと一般的な感じで「運用課」のほうがいいんではないかということでした。

——新座保存書庫の事務をやるのは運用課という名前なんです。できてすぐの年からです。新座の最初のころはどんな仕事だったんですか。

小関 ほとんどこっちから本が。

——送られてくると。

小関 あんなに高い金を出して買ったのに、かびだらけ

になった本も持ち込まれますから。本に対しての事は汚れの処理が一番です。建物は、今はちゃんと業者が入っているんだらうけど、あれだけの大きな建物造ると電気、ガス、水道、チャラーの専門家が常駐しないといけないらしいです。実際問題として出来ないでしょう。だから小型のものに分けて屋上に設置してあるんです。それらをいちいち点検記帳して、電気は一階のところ計器があるので自動的にデータが残るのだけど、特殊なガスだか何だかはいちいち現場に行くのです。一日に何かデータを記帳して、下に持って来るんです。それを契約した業者が一週間に一回か、一カ月に一回見に来て、チェックしていきます。

今、心理研究所になっている所の一番奥に機械室の入りがあってありますが、そこを開けると梯子があります。上がって屋根裏を開いて屋上に出ます。屋上には機械が並んでいます。その中の三つの機械を見て、記帳して戻るんです。それを一年ぐらいやりました。一日に三回だったかな。

——施設管理の仕事もあったわけですね。

——保存書庫ができた時点では空だったということですね。運用課ができて、行かれてから、どんどん送り込まれてきて、それを順次処理していったということですか。小関 そうです。それは大変でした。僕と小林さんとア

ルバイトが二人で。夏は昼にプールへ泳ぎに行きましたし、シャワーも完備していましたから、そういう面では面白かったんですけど、仕事はよごれとのたたかいたという印象です。すごかったです。五冊も重複しているから捨てる、除籍のための準備もしました。決裁は大変です、会計のほうに事前に相談しないといけないから。

それから、ぼろぼろで触るとぶわつと崩れる酸性紙なんかも。そういうものは使えないので廃棄するか、少し手入れをすれば再製本出来るかどうか、皮の製本も出来る新栄堂さん呼んできて。予算を取らないといけないんです。それに本そのものの整備と整理です。データづくりというか、立教の図書館として登録されているのか、幽霊本になっているのかは一目で分かりますから。データを一つ一つ作るようになったのは小林さんから後に続く人たちの仕事になってきました。本そのものが一度にドツと送られてくることはなくなりましたから。

——番号をつけ直すんですか。

小関 番号は一度つけたら生きます。購入したまま、寄贈したまま、そのまま何もしないでいるものが多いばいあるんです。例えば大久保文庫にしろ何にしろ、こっちの池袋に持ってきても処置できないから、向こう、新座に一度に……。

——大量の寄贈本ですね。

小関 持ってきて調べてみたら、物によっては半分以上は重複しているから、場所を取るだけだからどうしようかと。僕がいたころの主な仕事はこんなものですね。あとは高等学校との関係などいろいろ……、郵便物が配達されないので、直接郵便局に行って相談したり……、開発業務はそんなものかという感じです。

一九八二年、なにはともあれ、物量の緊急避難的に単独の保存書庫ができました。これは本邦初の試みであったので、図書館界に強いインパクトを与えることになりました。そして運用開始後一〇年が経過した頃、全国的な大きな大会―大学図書館研究会、全国図書館大会、国会図書館主催資料保存シンポジウムなど―によばれるまでになりました。それぞれの詳細な記録が残っています。

システム化への模索

――そのときにNDCを導入したんですか。

小関 違います。トータルシステム……。いちいち手書きするよりもパソコンで作業したほうがいいことは分かっていますね。立教大学だけで持っている機械でも、できないことはないんです。でもデータはよそに既にあるものを得て利用するほうがいいですよ。それにはお金がいるものもあるし、いらぬものもあるけど、基本的には安い

です。しかしこちらに大学全体のインフラができないと、図書館だけ電算システムを持っていても駄目です。そのためトータルシステムがないと駄目なだけでなく、図書館建築にお金がかかるのと同じように、お金が要ります。

それでも、いくら何でも手書きの時代はやめたいというので、貸し出し、予約とか、サービスの現場では、自分たちで作ったユニシスのシステムでやってしのぐと。それが何年か続いたと思います。同じ頃に全面的に外部のデータを利用するほうがいいと……、何年か、書いていないかな……。目録データの作成、このあたりはUTLASです。一九八五年のあたりです。

――すごい後ですね。

小関 常に潜在している分類法の問題は、つまりNDCへの変更の話は、僕が就職した頃から話題になっていて、僕が定年になる間際にやっとなす。

――すでにある本については、分類されたデータを自動的に買うということですね。

小関 そうです。

――それにしたのは、図書館の分類、整理という作業全部をコンピュータ化したと。

小関 トータルシステムです。

――そのときにということですか。

小関 NDC問題は図書館の全資料を対象にするか否か

を考えると大変なことになると思います。そのちよつと前の段階のときには、まだよそからのデータは分類以外のものを、貸し出しとか、登録番号を打つ蔵書管理とか、そういうところは独自に機械化して使っていました。最後のNDCに変えるというのは、ざりざりまできて、本当に最後です。トータルシステムがなければ、そんなことはやろうといってもできないわけです。

田口達也君は物静かなんだけど、粘着力があるからたびたび学部の図書室まで行って、「分類を変えます」と学部の館員の人を説得し、こうなるんだと。でも「私たちが今までやってきたものとの整合性はどうかのよ」と、反撥されて、がっかりして帰ってくるのか、そういうことの繰り返しでしたね。分類法の変更は、図書館だけの歴史を書くときにはすごいテーマです。特に立教の中ではすごいことです。スパックマンがなくなっちゃったわけですから。

——貸し出しが機械化されたのはそれより前ですね。

小関 ユニシスです。UTLASは外国のデータをもらって蓄めています。ユニシスのスタートは少し前かも。鈴木安彦君、吉田晃久君あたりでしょう。

——新座書庫ができたとき、運用課ができたときに、学部図書室を館長の直属にしたということがあったようですね。

小関 組織図を見ると分かると思うけど、図書館の中に学部図書室は線を引かれていなかったと思います。今度は図書館の中に、整理課、システム課、閲覧課とかと並んで、そのときに学部図書室が入ったと思います。僕はそのへんになると分からないです。あまり抵抗がなく、そのほうが当たり前のことだろうという感覚だと思っています。そうすれば館内の交流なり、異動なりがあるわけだから。それは図書館長のところでないとも異動はできませんから。線引きがこうなったんだと思います。

——各学部の図書室は例えば文学部図書課と課になったんですか。

小関 違います。課はないけど、担当課長はいました。課長待遇で行っていました。課はないけど、線引きとして、業務の上では課として認められているところはありました。

——新座には何年いらしたんですか。

小関 最初から二年です。後から調べるとだいたい二年で交代していますね、たすき掛けで。小林さんはたぶん一年で帰ったと思います。その次に茗荷さんが来てくれました。茗荷さんが二年いると次は課長が新坂さん、という順です。そうでないとも精神衛生上……。やがてキャンパス全体が出来上がってきますから、中屋君にしろ吉田晃久君にしろ宮澤泰さんにしろ、長くいてくれました。

逐次刊行物課長、副館長のことなど

——二年たつて一九八四年に逐次刊行物課に行かれたわけですね。

小関 はい。

——雑誌室にいられたんですね。

小関 今のあそこ〔現・資料センター〕ですね。逐次刊行物とレファレンスが、情報源と接近してよかったと思つたら、口の悪いのがいて「小関のために課をつくつた」と言われました。

——課長にしないといけないから課にしたと。

小関 そうしたと陰口を言つていて。

——小関さんがこられて逐次刊行物課になったと。

小関 そうです。前は整理課の中の逐次刊行物係だったんです。

——係でしたか。

小関 係レベルだったんです。

——実態が変わつたわけではないということですね。

小関 前のことは詳しくのぞいていなかったけど、独立させたほうが絶対に……。図書と雑誌は違いますから。データの作り方も違うし、本屋の扱いも全く違いますから、変えたほうがいいと思うので、すつきりさせましたように思います。これはよかつたと思います。

参考室と逐次刊行物課では張り切つて多くの仕事をさせてもらった気がします。このころは、個人的に非常勤講師の授業をいくつか持つていて、他の大学へ通えたのも勉強になりました。

——レファレンスと逐次刊行物が密接に関わりがあるのは初めて知りました。

——逐次刊行物をいじっていると最新の研究の動向とか、そういうものが見えてくるということですね。

小関 早いデータを入手出来ます。

——非常勤に行かれ始めたのは何年ころからでしたか。

小関 一九七二年です。

——昔から行つていましたね。東洋大学とかに行つていましたね。

小関 最初は聖徳短大です。次に東洋大学の社会学部に行つて、東洋大学は短大も行つています。これは長かつたですね。亜細亜大にも行つています。立教でも。立教の学生にはすごく役に立つと喜ばれました。「書誌解題」という授業です。好きなテーマを選んで書誌をつくるので、これは楽しかったです。大学院生から二年生までいて、参考室や資料が活用出来て結構おもしろかつたようですよ。

——他大学で教えた内容は分類ですか。

小関 最初は分類と目録という縁の下の力持ちみたいな

仕事です。そのほか、資料論とかサービズ関係ですね。僕がやっていたのはレファレンスの概論とか演習が主でした。

——雑誌室〔逐次刊行物課〕にはしばらくいたんですか。

小関 一〇年いました。あとは副館長と兼務です。

——兼務でしたか。

小関 兼務でした。副館長はみんな兼務です、このあたりから。僕の後の牛崎君も事務課長兼務だし、僕の前の篠原さんも整理課長を兼務です。今は事務部長がいるんですね。

——そうです。異動しないで図書館にずっといた人は副館長以上になれないから、よそから来るんです。

小関 国家公務員みたいに専門員職制をもうければいいんです。それで選択させれば、お互いによいんですけど。

——そういえば図書館に専門調査員という人がいた時期が……。

小関 天野さんね。国会図書館の名前をお借りしただけでしょう。役職定年で六〇歳になってから、六五歳まで務められますよね。でも当時は処遇はどうしていいか分からなかったみたいですよ。今は主幹という名称がついていますけど。天野さんも課長を終わった後、どこに行くというよりも、そこにいたほうが戦力になるという判断だったのではないですか。

——課長の肩書が取れちゃって名前をつけるのに……。

小関 いい名前だったです。誰かが探してきたんではないですか。国会図書館では主に議員のリクエストに応じてその人のためにこつこつ調べる研究職のようですから。

——一九八〇年代後半には図書館に大学史資料室ができるんですけど。

小関 それもこい〔Mather Library〕にありました。

——できるといってではなくて……。

小関 こつちから回されちゃった感じですよ。

——その前は総長室にありましたね。

小関 大学史資料室でしたか。

——大学資料室という時代もあったし、大学史資料室という時代もあったし、いつどうなったかは分かりませんが、総長室にあったんです。伊沢さんは図書館生え抜きの方で、『百年史』の編纂をやった人です。住田さんは元広報課長です。その二人が総長室で大学史資料室をやっていました。

小関 だいたい二人体制ですね。組織、名前はいろいろ変わりました。

——組織のあり方が変わると。

小関 そうです。今は学院ですか。

——いえ、大学です。資料室はずっと大学所属です。一九八九年に総長室から図書館に移ってからは図書館大学

史資料室です。その後は最上さんが来て池田さんが……。その前に石田さんがいて……。最上さんが辞めてから池田さんが一人です。池田さんと最上さんが大学史資料室にいるときに、僕は学院本部で『百二十五年史』の編纂室をやっていたんです。

『百二十五年史』が終わって、学院の編纂室がなくなる時に学院史資料センターを作って、研究機関にしなさいと大橋総長に言われました。それで大学史資料室と合併したんです。

小関 図書館所属の時に多田さんもおりました。よそからのレファレンスで質問があるでしょう、大学のこと、資料、古いところで。学生が聞きに来たり。そういうときに僕らが見られないような資料を資料室では持つていましたから丁寧に答えてくれて、助かったことがあります。

——ちよつと前に聖公会資料に関する委員会……。

小関 それは図書館内にありました。今も存続しているのかなあ。難しいんです。聖公会はキリスト教の中のプロテスタントの分野に分類番号があるはず。聖公会資料の収集と整理が主な役割ですが、資料のおさまり場所として、一般書として普通の本と同じように置いておいたほうがいいという考え方があり、一方では立教は聖公会の大学だし、聖公会を研究する人のほうがよく使う

わけだから、その分野の資料は特別な——分類番号は同じで情報として同じように扱うけど——聖公会資料としてまとめて置いたほうがいいんじゃないかという考えです。見学などに行つて、いいものをいただきたいり、買ってきたりして、収書するのは大切ではないかということ。それは日常の業務の中でなかなかできないから、館内で四、五人の聖公会資料委員会をもうけたほうがいいと作られました。飯村惣一さんが、現在別置してある聖公会資料を、冊子目録にして編集し、草稿の段階だけど、学内に配つたことがあります。

——現在は聖公会資料という形でものを扱っていますけど、それまではばらばらにあったということですか。

小関 どちらかといえばばらばらです。しかし特に古いものは聖公会資料、文庫として別置しておいたんです。何でもかんでも聖公会資料に持つていかれてしまうと、それでは困るということもありました。伊沢さんは特によく考えておられたと思います。

学内の先生方も含めて『The Spirit of Missions』を今すごく大事にして、いろいろなところで利用するではないですか。それを見つけたのは誰だと思いますか。学内で知っていたのはたぶん伊沢さんだけです。図書館の古い書庫のホントに下のほうに横積みでした。伊沢さんも在る所はあまり詳しくはなかつたです。彼は受け入れを

やっていたから、記録にはあったと思います。それで、よその大学の学院史をやっている、桃山学院かな、その人から「立教に『The Spirit of Missions』があるはずだから見せてくれないか」と伊沢さんに依頼がありました。それで探してみたらやはり図書館にあったんです。動かせるような状態でないところがありました。これは貴重な資料だから、欠号もかなりあるから点検しておいてくれないか、と言われました。

新座保存書庫ができる前なので、書庫の隅っこに行ったら、ざっと欠号だけは暇を見つけてチェックをしておいたんです。保存書庫ができて現物を新座に運んで、一覧表にして、もう一度アルバイトの人に探してもらった後に、桃山学院さんも伊沢さんも来て欠号のチェックを見た後に、欠号を埋めたいという希望でした。国内の所蔵状況を調べると、他で持っているところはどこにもありません。同誌はその後『フォース』誌とか『エビスコパリアン』誌につながります。それも全て調べたけど、ありません。ならばうちで持ったほうがいいという判断で、キリスト教学科とかチャペルとか、学内で知っている人、どうやって収集したらいいかを知っている人に聞いたことがあるんです。でも誰もが「えっ？」という感じでした。その頃に塚田〔理〕先生が、アメリカに行っていたか行くかの時で、伊沢さんをお願いして塚田先生宛

に、欠号補充依頼の手紙を書いて出してもらいました。やがて送られてきたのを含めて製本して、ハードなものとして保存することにしたです。僕がおふくろの写真を見つけたのはそんな欠号、欠頁を調べてる最中です。また、その仕事の中から『築地居留地鳥瞰図』を見つけました。

——ガーディナーの。

小関 ガーディナーの。誰かに「これを見つけた」と言ったんです。伊沢さんに言ったのかな。それもいろいろなところで利用されるようになりました。『築地居留地』という紀要は三号まで出ているけど、そこにも載っています。両国〔江戸東京博物館〕のほうから問い合わせがあったときにも提供した記憶があります。保存書庫ができなくて、そのままにしていたらまったくアウトでした。

——『百年史』（一九七四年刊行）に『The Spirit of Missions』が少し引用されていますね。

小関 誰かが使っていると思います。

——海老沢有道先生がたまたま持っていたのを見て……。小関 そうかもしれません。海老沢先生は伊沢さんとキリスト教史で懇意ですから。それと、皆さんが大事にする図面だけど、マーフィー&ダナの立教設計図は天野さんと伊沢さんが見つけたんです。アメリカ研究所〔図書

館旧館内にあった」の中に大きな戸棚があったんです。普段は開かないような、引き出しもガタガタしていて。

——青写真の図面ですか。

小関 図面です。すぐに施設課にも見てもらって、ちゃんと生き返りました。よかったです。今、私はボランティアで江戸東京たてもの園に行ってますが、エントランスホールの中に建築の歴史の流れの写真が貼ってあるんです。江戸から東京になったときの写真です。「えっ、何でこれ……」と思ったら『The Spirit of Missions』って。立教大学図書館提供とありました。

——何が飾ってありましたか。

小関 鳥瞰図です。

——鳥瞰図はありましたか。たてもの園には何回も行ってはいるんだけど……。

小関 企画があるときは別の展示です。これで自慢が二つです。本当によかったです。今どうなっているんですか。

——『The Spirit of Missions』ですか。

小関 どうやって使えますか。

——マイクロフィルムにはなっているでしょう。現物は新座保存書庫の奥の書庫に入っているから、僕らが使うときはあらかじめ予約して出してもらって、コピーしてもらいます。

小関 立教大学新聞みたいに写真を撮ったのかと思っただんです。

——そこまではいいじゃないですか。そこからこれ『THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成』を作った。これは本当に助かりました。しかし利用者が書き込みをしたり、グラビアのところを切り取っている人がいるんです。

小関 利用者でなくて、おそらく現物が立教に入る前だと思えます。うちに入ってからはその人だけが個人的に使うことはまずないですから。

——これは本当に助かっています。これで『百年史』以降、立教史で今までいわれていたことと違う、幾つもの発見がありましたから。

小関 あそこにあるんですね。

——あります。重要なものだから立教大学新聞みたいに全部デジタル化して、全ページをやるべきだと思います。

小関 やったほうがいいけど、すごい量です、新聞どころではないです。

——立教大学新聞は中身がかなりいいかげんですから。

小関 あれは基本資料でないけど、立教大学新聞は学生が作ったから。逆に裏面史みたいな。

——そうなんです。現在、立教大学にはそういう媒体が

ないんで、後で苦勞すると思うんです。

小関 あれもなくなくなるところだったんです。捨てられるところだったんだから。ボール紙に貼っているでしょう。捨てられるところでした。

— そんなことはかりですね、立教は。

小関 恐ろしいです。持つところもばらばらで、酸性紙化しているから。

— 今は補強、パウチ〔エンキャプシユレーション〕して壊れないようにしています。

小関 あれはこつちにあるの？

— こつちにあります。

小関 あなたのところにあるの？

— はい。画像は全部を図書館でアップしてあるから、ネットで見られます。

本格的なシステム化

— さて、一九八〇年代半ば以降では、図書館の大きな課題はどういうことですか。

小関 システム化推進への意識でしょう。学部図書室、資料室があって、同じような問題を引きずっているけれども、統合する前提になるのはシステム化です。立教はお金がないけれども、よその大学に比べてよかったのはおおむね全員にパソコンを配ったことです。最初は富士

通だったか。仕事でいろいろなことに使うようになったけど、それより前にとにかく使えるようにという感じで最初は一人一台ずつ配られたように記憶しています。

— それは一九九〇年代後半でないですか。

小関 もっと前でしよう。

— 僕は持っていないかったです。

小関 図書館では持っていました。そのおかげで、システムに載ったときに苦勞せずに、トータルシステムに参加することができるようになったんです。コンピュータによる協力の世界に、立教は最後になったけど、やること自体は早かったです。そこが一九八〇年代から一九九〇年代の意識の高まりとインフラの整備でしょう。大成功だったんではないですか。お金はどうしたのか知りませんけど。

— 一九八〇年代後半はまだパソコンというよりも一般的には汎用機の時代でしょう。立教もコンピュータセンタ―に大きな機械があって。世の中にパソコンの時代が来るのは一九九〇年代に入ってからですが。

小関 一九八〇年代は外部で作ったデータをうちでも少しづつ得て貯えようという時代です。

— カードの形で買っていたんではないですか。電子データですか。

小関 電子データで得て貯えるようになっていました。

こちらの情報もいざれ使うようになるからためておくという形でした。牛崎さんや小林さんがずっとやっていた時代です。それがこのへんです。

——一九八七年に「バーコードによる蔵書管理の準備」という年表の記述があります。その一環ですか。

小関 手から機械にという意味ではそうです。うちではそうだけれども、よその大学ではトータルシステムを作るのが五年ぐらい早いです。他大学では物理的な、図書館の建物の新築や増築はもう済んでますから、費用はほとんどんシステムのほうに行きますから。

——一九九一年にコンピュータによる貸し出しシステムを始めたということですか。

小関 はい。ユニシスです。立教だけで開発しました。開発するお金を使うよりもトータルに使うものに回したほうがいいという考えが特に整理課などで。一方、そんなのはいつになったらできないんだから貸し出しがいっぱい手で作るよりもピッピッとやったほうがいいんではないかという対立が、どうしてもありました。貧しさゆえの工夫だと思えますが。うちだけしか使えないようなシステムでは不経済かな……と思ったりしました。

——うちだけの独自のシステムで、大きな汎用機は入れていたんですか。

小関 UNISYSがありました。それを開発してくれ

た業者があります。それを「立教でうまくできていたソフトだからおたくで入れたらどうですか」という営業はやったみたいです。いくつかは、どこかに入ったかもしれません。

——図書館で独自のシステム、独自の機械を持っていたんですね。

小関 そうです。

——その期間はそんなに長くなかったですね。

小関 長くないです。UTLASは外国の、あちらで作っている外国書の情報なんだけど、それに立教も参加して、うちでも買いましたから、そのデータを蓄積していたんです。トータルシステムになったときにそのまま持つてくると立教オリジナルなデータの部分は変換しないとイケませんよね。そういう仕事が一九九〇年代に入ってから、入力業務も含めて専任の館員がいろいろやってくれました。

——学生たちが目録を引くときにカードからコンピュータに変わったのはいつですか。

小関 立教の場合はRISMに入ったところだから一九九五年ころです。あるいはもう少し経ってからだったかな。

——その頃はまだカードがありましたね。

小関 今やあれも何とか遺産になりました。

——皆さんはもう図書カードというものを知らないです

ね。逆に一九八〇年代後半ぐらいまではカードで引いていたということですね。カードも後半は印刷でしたか。

小関 国会図書館作成のカードから、やがてUTLASから印刷したカードになりましたが、それに立教独自のデータを入れて、ファイルするんです。立教独自の大きな情報はDDC番号ですね。しかし外から得た方が標準的な情報をもたらえるわけです。一生懸命に一冊一冊本を見て「これは…」なんてやらなくてもすむんです。しかしそれをやるおかげで文献、情報そのものの価値判断力がつくんです。だから、研究者にありがたがられる面もありました。

——レファレンスの基礎にもなるんだろうと思いますね……。法学部の独自の分類をやめて混ぜたのはいつですか。

小関 年表によると、一九九五年にいろいろ画期的な事がありました。カードや目録作成の停止、そして分類の変更なども……。法学部は最初に先生がやっていて、あれは大変だと野村（浩一）先生も言っていたけど。そのうち法学部出身の人達が図書館から出向した時代に法学部独自の分類作業という仕事加わりました。たぶん学院の総務課長・事務局長をやっていた山田義雄君がはじめてではないかなあ。

——法学部独自の分類というのは本館から急に異動して

もできるものなんですか。

小関 慣れないとちよつと。十進ではないですから。国立国会図書館の分類は独自の分類で、それに似ているんです。アルファベットを使うから。数字の場合は10です。展開はしやすいんです、数字が身に染みている人には。Uだったか、Sだったかと言ってうるうるするよりも。——システム化するまで法学部は独自の世界にいたわけですね。

小関 独自の世界です。おもしろいです。

——DDCや法学部の分類も、全部が最終的にはNDCにつけ直したということですね。

小関 つけ直しもつけ加えも、データ上は易しいですね。しかし現物そのもの変更は難しいですね。小林さんに教えてもらったのですが、物の方もつけ直して、「旧UDC」の名称で別置してあるそうです。別置は量の問題が絡みますが、ある程度は仕方がないでしょう。一方、歴史を物語る面もあるようです。統合して維持しているのは情報を誰でも、どこでも使えるということと、建物とシステム化がうまくいったということです。ロイドホールのように研究室と一緒というのはいいんだけど、独立棟にして一般にどんどん開放したほうがいいんじゃないかと個人的に思います。それはシンボルになるでしょうね。社会にもっと開いてくださいという感

じがします。

——大学というところはどうしても先生の声が強いですから。

小関 そうはいつでも、一般の人にも開放している大学図書館もそれなりに多いのではないかな。でもそういうのは独立棟にしないと。

——管理が大変ですね。

小関 無料ではなくて、有料でいいと思うんです。慶應なんて以前はお金をとっていたと思います。

——上智は前にそういう感じでやっていましたね。

小関 そのほうが行きやすいんです。亜細亜に非常勤で行っていたときは年間三〇〇〇円で皆さんと一緒に使ってくださいと。

——図書館法上も問題はないですか。

小関 図書館法上は全然問題ないです。

——あとはキャバの問題で、完成したときから普通の学生だけであふれんばかりになっていきますから、そうするとなかなかというところはあるんだろうと思います。

小関 今、学生は信じられないぐらい増えているでしょう。何万人ですか。

——二万人くらいですか。

小関 都市型中規模と申すんですか。

——この校地面積に対しては明らかに飽和状態だと思います。

ます。

小関 きょう来でも息苦しくなりました。レンガ造りの後ろにいきよき高層建築ではやっぱり……。東京駅と同じで、ビルの中に埋まっている、かわいそうじゃないですか。あれと同じになってきました。

——だいたいひととおりお聞きできました。詳しく伺えてよかったです。

【インタビューのあとで】

私は立教大学図書館の歴史を一言で表現すると『魁』だなぁと誇りに感じています。戦前は小規模な大学だったけど、二〇年間も在任したスバックマン館長の情熱があります。それは十進分類法の実践と啓蒙、図書館学料設立の構想、オープン書架方式などです。戦後は読書相談係の設置、丹下健三の図書館、新座保存書庫などで、成果はべつにしてもいずれも本邦初の試みかそれに近い挑戦でした。今後とも図書館は、池袋煉瓦校舎群のあの理想的な配置図の原点を胸に「何か」に挑み続けて欲しいと願っています。(二〇一六・一 小関昌男)

(二〇一五年年七月二九日収録)